

シャルトル大聖堂の薔薇窓

——構造に関する覚え書——

高 野 禎 子

はじめに

一一九四年の大火災の直後から十三世紀前半にかけて再建されたシャルトル大聖堂には、三つの薔薇窓がつけられた。

西正面入口「王の扉口」上方の西薔薇窓(図1)、南北翼廊の両端、南北西正面入口の上方にある南薔薇窓(図2)と北薔薇窓(図3)である。⁽¹⁾

薔薇窓とは、西洋中世のキリスト教聖堂建築において、入口上部の壁面に穿たれた大きな円形の窓のことである。⁽²⁾ 中心から放射状に周縁へと広がるトレーサリと呼ばれる石造の骨組みを有し、殊に北フランスのゴシック大聖堂で発展を遂げた。シャルトルの場合、三つの薔薇窓はいずれも十三世紀前半の約二〇年前後の幅で作られたと考えられている。しかも内部を充填する華麗なステンドグラスは、大聖堂の壁面全体をおおう多数の高窓のガラスと共に、制作された当時の姿を

相当良い状態で今日に伝える貴重な作例である。⁽³⁾ 本稿はしかしながらこの薔薇窓を、通常問題とされるステンドグラス芸術の側面から扱うものではない。そもそもステンドグラスは、聖堂内部にあって見る立場を前提とする絵画芸術である。これに対し、聖堂の外部から薔薇窓を見る立場がありえよう。⁽⁴⁾

一九八四年、フランス文化省の文化遺産局の手で興味深い報告書が刊行された。『薔薇窓——その構造研究——』と題された報告書⁽⁵⁾の中で、シャルトル大聖堂の南薔薇窓の構造が数枚の図面と共に詳細に表わされている。それらの図面、並びに他の聖堂の薔薇窓についての報告は、示唆に富むものである。

ここに「覚え書」の形で記すのは、一般にゴシック大聖堂の薔薇窓で注目されることの少ない、聖堂外部からの視点でそれらの窓を捉えることである。この外部からの視点に立つ時、薔薇窓は何よりも建築の一部に還元される。形態としての巨大な円形の開口部、その空隙を充填する手法の一種である石造トレーサリの構造と装飾などが問題となるであろう。以下に三つの薔薇窓の外観を見ながら、特徴について記述する。その際、薔薇窓の起源や象徴性⁽⁶⁾、またステンドグラスの図像学など通常重視される諸問題には触れず、純粹に構造的な側面にのみ限定して考えることにしたい。はじめに窓のトレーサリ全般について略述し、後に三つの薔薇窓を具体的に見る。

トレーサリ

トレーサリは、窓の開口部に組み込まれた装飾的な狭間飾りを表わす英語表現である。⁽⁷⁾ 特にゴシック建築の高窓の上部や薔薇窓の装飾的な意匠として著しく発展した。トレーサリには次の二種類が区別される。

(1) プレート・トレーサリ plate-tracery

板状の石をくりぬいて穴を開けた形のトレーサリ (図4)

(2) バー・トレーサリ bar-tracery

棒状の石材を用いて窓の開口部を充填する形のトレーサリ (図5)

これら二種類のトレーサリは、前者が十三世紀以前の窓に用いられた初歩的な形であるのに対し、後者はゴシックから特にその末期に至って発達した。レイヨナン様式⁽⁸⁾、さらにはフランボワン様式⁽⁹⁾などと呼ばれた火炎状の複雑な装飾の窓飾り (図6) へと変化してゆく⁽¹⁰⁾。

シャルトル大聖堂の三つの薔薇窓には、後述するように、性格の異なるトレーサリが、多様な仕方で用いられている。以下に西、南、北の順で具体的に見てゆくことにしよう。⁽¹¹⁾

西 薔薇窓 (図7、8)

中央の円の周囲に、計三層大小とりまぜたモチーフが展開する。これらはいずれも十二という数でまとめられており、大変安定した構図となっている。細部を見れば、細かな装飾が随処に施されているのがわかる。

中心部の小円には、十二葉の縁飾りがあって、その周囲に放射状に広がる車輪の輻の如き石の姿は、十二基の柱である。柱礎、柱身、柱頭の各部位が、それとわかる形で造形されている。柱礎部分は、三角形で基台を重ね、柱身は丸みをおびて太く力強い。柱頭部には植物モチーフが浮彫りされ、逆台形の冠板が上に載る。これらの柱をつなぐのは、半円アーチ列である。全体として大型の花びら状モチーフを形成する。これらはしかも、内部のステンドグラスを補強するための、大小二つの鉄棒の円を取り囲んだ形である。

さらに外側では、八葉の縁飾りのある小円が配され、もう一層ごく小さな四葉形のモチーフが外周を取りまいて展開する。これらの諸々のモチーフ、並びに西薔薇窓全体の輪郭を形作る最外層は、二層の細い枠どりで囲まれるが、その部分にも細かい装飾が全体になされている。主として見られるのは、葉状モチーフと小さな花形モチーフである。こうした細部意匠の造形性は、後述する南北の薔薇窓と比べて、西の場合が最も顕著であり、西薔薇窓のトレーサリの大きな特徴となる。

こうしたトレーサリの形態、すなわち石板状の石の面に開口部が開けられる形は、先述の如く、プレート・トレーサリである。石板の面積が相対的に大きく、聖堂内部からこの西窓を見る時、トレーサリの石の面は暗い闇となる。ステンドグラスの輝く色面の背景地としての黒色は、こうした石の面が作り出し、明暗のコントラストを際立たせるのである。

南北の薔薇窓 (図9、12)

南北二つの薔薇窓は、西のそれと比べて一見して純粋な幾何学的構成に近づいている。南では特に円形が強調されるのに対し、北では四角形ないしは三角形の形が強調されている。特に北のトレーサリは、中心部に向けて対角線状に配された正方形のモチーフが、窓全体を鋭角的に区切っている。

西の薔薇窓と同様に南北でも、モチーフの数は十二に統一され、安定した対称性を保っている。南北の両窓もまた三層のモチーフ列を形成。中心から放射する輻状の柱が、西のそれより一段と華奢に細くなり、線的要素が強まって見える。とはいえ、柱礎、柱身、柱頭のいずれの部分も、それとわかる形で造型されている。南の場合、これら柱状の輻を結ぶのは、三葉形のアーチ列である。

三葉形アーチは、西窓の半円アーチ形と比べて一般に後代のものであり、一段進化した複合型アーチである。アーチ列の外周には、南では円形、北では正方形が並ぶ。南の場合特に注目されるのは、十二の円形のうち、上下左右の十字形をなす四つの円のみに、八葉形の深い縁飾り装飾があることである。さらにその外周は、半円形モチーフが配され、すき間を四葉形の小さなモチーフが埋めている。

北薔薇窓は、鋭角的な印象が強い。全体として細部の意匠については、南と類似しているにもかかわらず、両者の相異は顕著である。特に、正方形の中間層が輻状の柱と接して作る破風型の屋根の如き形が特徴的で、窓全体に変化をつけている。その内部には、南の三葉形アーチと類似した形で、中央部がさらに突出した変形の三葉アーチ形のトレーサリがある。石が黒ずんでいるため、これらの形は外部写真から必ずしも明瞭ではない。内部のステンドグラスの写真と比較すれば、そのことが確かめられよう。さらに外周を半円形モチーフが並び、その間を埋めるのはやはり南と同様の小さな四葉形モチーフである。

これら二つの薔薇窓は、全体の輪郭部分を形成する数層の枠が、上方と下方で異なっている。西窓とは違う点が、ここにもある。薔薇窓の上部、約三分の一円強程度の円弧にのみ、簡素な小花形モチーフが施されている。装飾性が相当弱められたことがわかる。尚、北薔薇窓の上部の隅には、後代のものと見られる彫像がとりつけられており、下方には壁体をくりぬいて左右四つの、高さの遞減する窓が穿たれている。

二つの窓のトレーサリは、石造の部分が限られた大きさになり、開口部を充填する殆ど棒状になった石材は、一見したところバー・トレーサリに極めて近い形に見える。⁽¹²⁾ その結果聖堂内部から見て、黒い背景地は減少し、ガラスの面積が増大することになる。トレーサリの線的要素が強まって、全体に拡張されたガラスの光彩面を背景とする、心もち太目の素描線となるのである。西薔薇窓では、背景地として闇の面を作り上げたトレーサリが、南北の薔薇窓ではガラス面上の素

描線となって、両者の関係が明らかに逆転している。

一般に三つの薔薇窓の年代は、西が一二一五年頃、北が一二三五年頃、南はその中間の一二二〇年頃といわれるが、これは内部のステンドグラスの制作年代と考えられる。ここで、本来壁体の一部である薔薇窓のトレーサリは、この年代よりも当然早く作られていた。特に南北翼廊部の穹窿天井の完成が、一二二一年であることより、南北両薔薇窓のトレーサリも、その年代を下限とすることができる。いずれにせよ、一一九四年の火災直後の再建で、少なくとも三つの薔薇窓に關する限り、一番最初に着手されたのは、西正面の上壁であったことは確実である。既述の通り、半円アーチ形及び装飾性、プレート・トレーサリなど、いずれの点からも西薔薇窓が、最も古い形式であるのは明らかである。恐らくは同じ二十年近くの幅の年代差が、西壁上部と南北の壁体にも想定されるであろう。

最後に、冒頭に掲げた『報告書』の中から南薔薇窓のトレーサリの図面を引用して、今まで述べた事柄を、補足しておきたい。

南薔薇窓の構造図

——『報告書』の図面より——

一九八四年の『報告書』には、三枚の図面に分けて南薔薇窓の構造が図解されている。⁽¹⁴⁾ 図13、15がそれである。以下に図に即して説明を加える。

図13は、外側の半円アーチ形と円形モチーフの列の間の四葉形の開口部を示している。図面中央の四葉形の下方に向っ

て、小さな樹木状のモチーフが浮彫りにされて外周へと伸びている様子や細かな花形や葉状の縁飾りが湾曲したアーチ状の部分に散りばめられている様子がわかる。石の空間に、できる限りの変化をつけようとした意図が汲みとれる。

図14は、中間層の円形部分の拡大図である。先図同様に、葉状モチーフが細かくちりばめられている。

図15は、最も示唆に富んでいる。中心円から周囲へと放射する車輪の輻状の柱の部分の構造が興味深い。断面A (Coupe A) は、柱身部の断面図を表わすが、ここで柱身が八角形の形で、殆ど丸彫りに近い形で外部に突出していることがわかる。また断面CD (Coupe CD) は、周囲の三葉形アーチの割り形を示している。複雑な形で壁の外部に向けて意識的に装飾を施していることに注目しておきたい。実際、内部に面した部分はほぼ立方体に近く、平坦な断面図である。このことは、内部からストロボをあてて撮影された写真(図16)を見れば、その様子がわかるであろう。⁽¹⁵⁾ 聖堂内部から薔薇窓の撮影をする場合、原則としてステンドグラスを撮る目的であろうから、内部の石造トレーサリの装飾が、これ程無頓着でぞんざいであることに気付かない。南薔薇窓のトレーサリは、現在の状態がこのようになっていたことを、『報告書』は、教えてくれる。

残念なことにこの『報告書』には、他の二つの薔薇窓の図面は含まれていない。デラポルトによれば、南薔薇窓のトレーサリは、「一八七七年の修復の際に大幅に改修された」という。⁽¹⁶⁾ 当時の修復が、もとの状態を正確に復元しているかさらに詳細に検討しなければならない。

ともあれ、『報告書』を手掛りとして、十二世紀半ばの薔薇窓の誕生から十五世紀にかけての変遷の経緯を辿る時、シャルトルの三つの薔薇窓が、ステンドグラスの諸問題のみならず、トレーサリ自体の造型性という点でも重要な意義をもっていることを強調しておきたい。

結び

以上の考察から、三つの薔薇窓を外部の視点から見た場合、その特色をまとめると次の二点に集約される。

(一) トレーサリは、西窓と南北の両窓ではその性格が異なる事。前者がプレート・トレーサリ、後者はその発展型と考えられ、バー・トレーサリに極めて近いものとなっている。その結果、石の部分の面積とガラスの部分の面積の比率は逆転する。内部から見ると、ガラスと背景地の関係が西と南北両窓とは逆になる。この変化は、通常薔薇窓の、特に内部のステンドグラスの年代が、西↓南↓北とされるのに合致する。従って、壁体の一部としての窓のトレーサリの年代も、西↓南↓北の順序と考えてはば間違いないであろう。但し既述の通り年代の下限は一二二一年となる。

(二) 聖堂の外壁面に対する装飾的配慮は、西窓で最も濃厚であるのに対し、南北の窓ではそれが希薄となっている。西窓で、車輪の輻状に広がった十二基の柱は、実際の聖堂内の柱にも似て、細かな装飾がほどこされていたし、他に繊細な装飾モチーフ、花型などが多く見られた。中央の大型の花にもぞらえられたモチーフを周囲の小形の円のモチーフが囲むという、一種の中央収斂性⁽¹⁷⁾とも呼べる西窓の配列が、南北では均質化して、幾何学的で抽象的な構図に変わる。このことはすなわち、内部空間へと重点が移っていったことと表裏一体の関係になる。但し、南窓で詳細に見た通り、依然として外部の壁体には、装飾的意匠もなお相当程度残されていたのは注目に値する。

以上、大まかに二点に分けてシャルトルの薔薇窓の変化を捉えることができた。これらの作例の後、ゴシック大聖堂の各地で作られた他の薔薇窓が、どのような装飾原理にもとづいてその姿を発展させていったか⁽¹⁸⁾。これはさらに今後続く

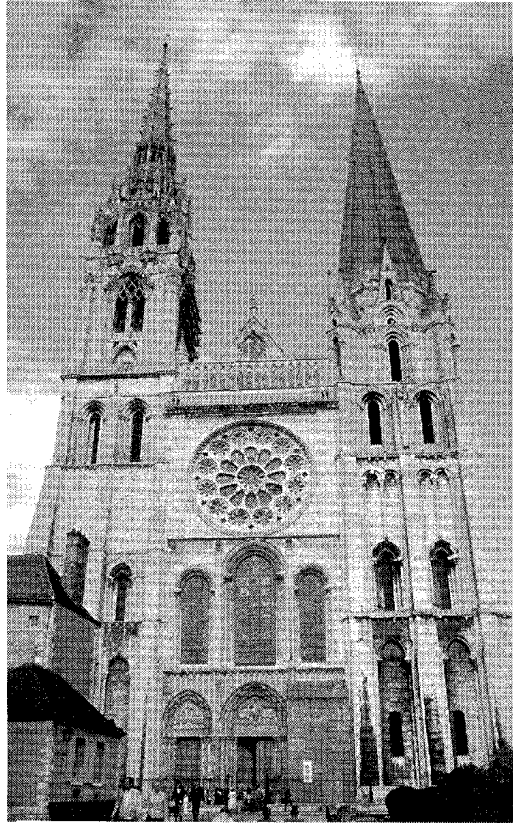


図1 シャトル大聖堂西正面

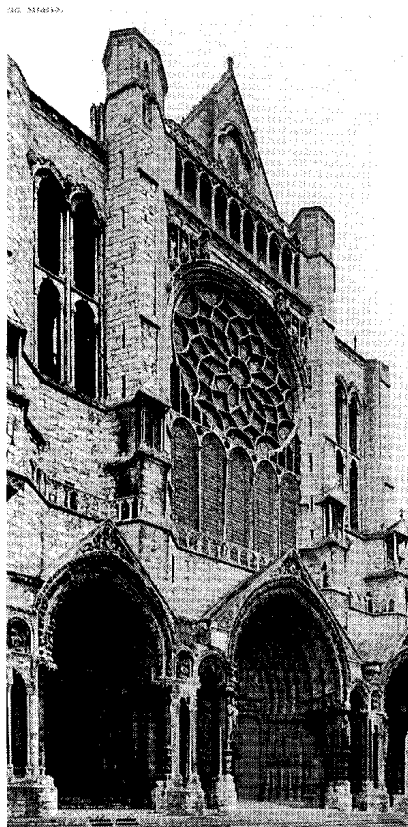


図3 北正面

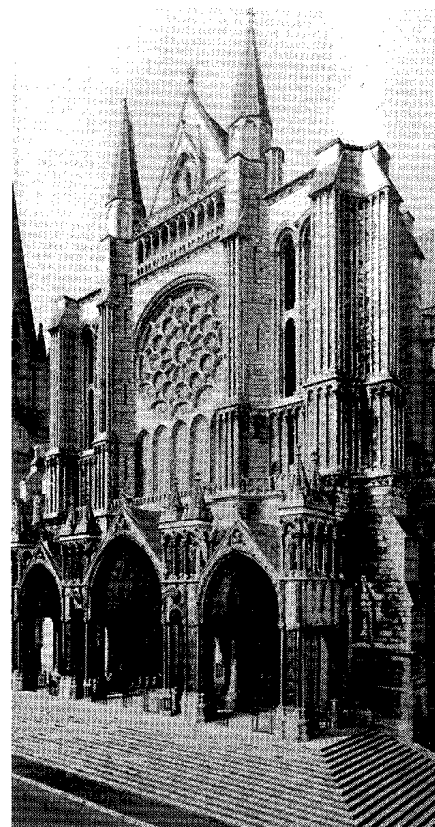
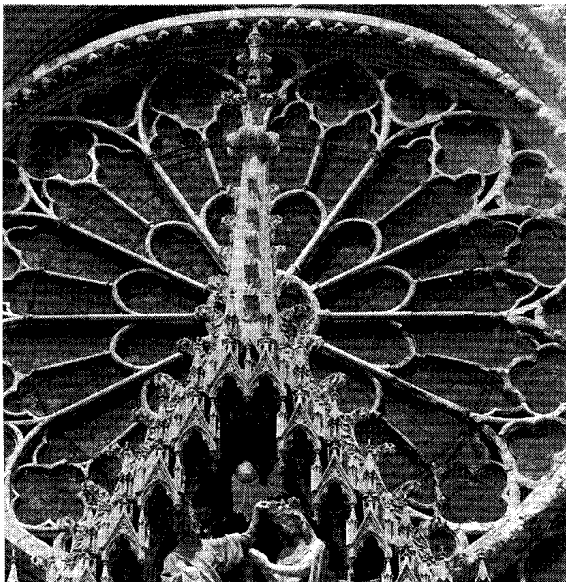
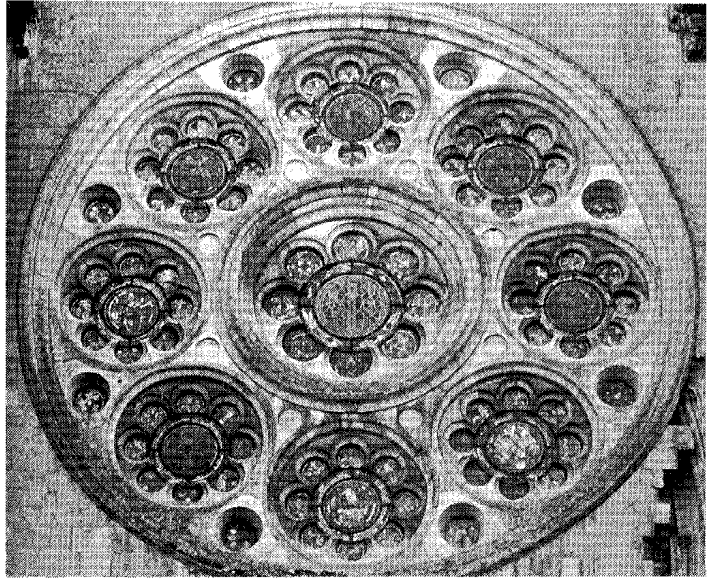


図2 南正面

図4 ラン大聖堂北薔薇窓,
1200年頃



(左) 図5 ランス大聖堂西薔薇窓,
1270年頃

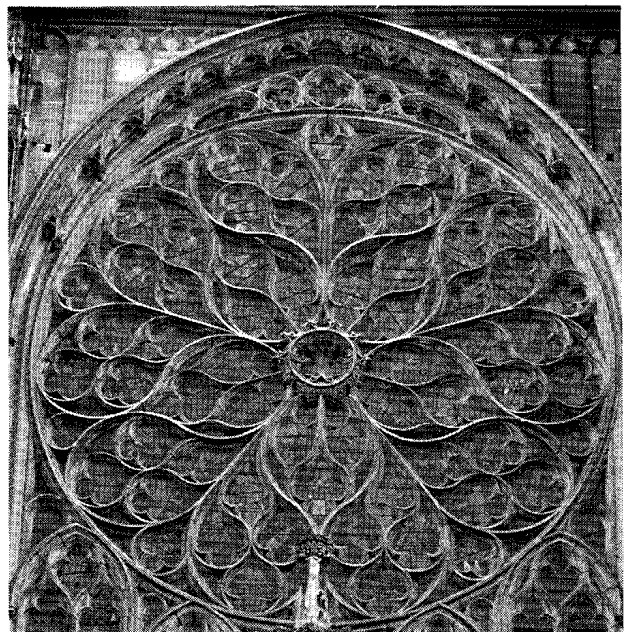


図6 サンス大聖堂北薔薇窓,
16世紀初頭

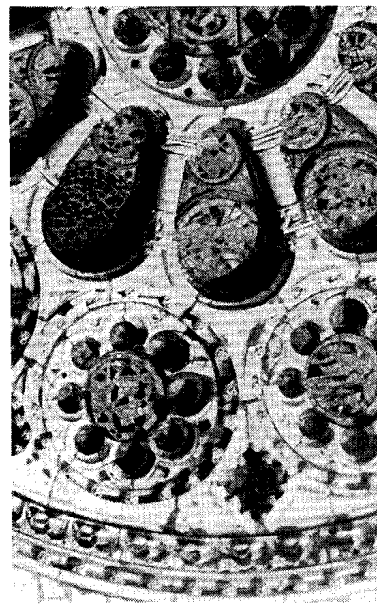
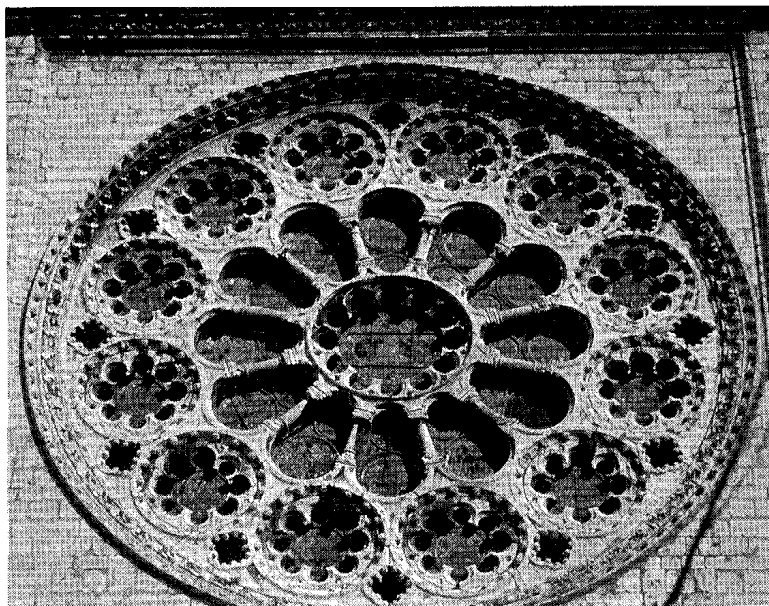


図 7, 8 シャルトル大聖堂西薔薇窓, 部分図

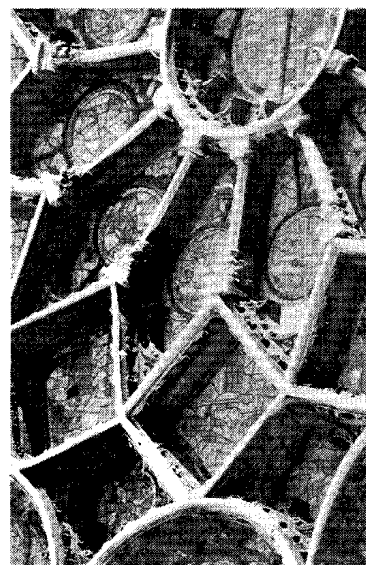
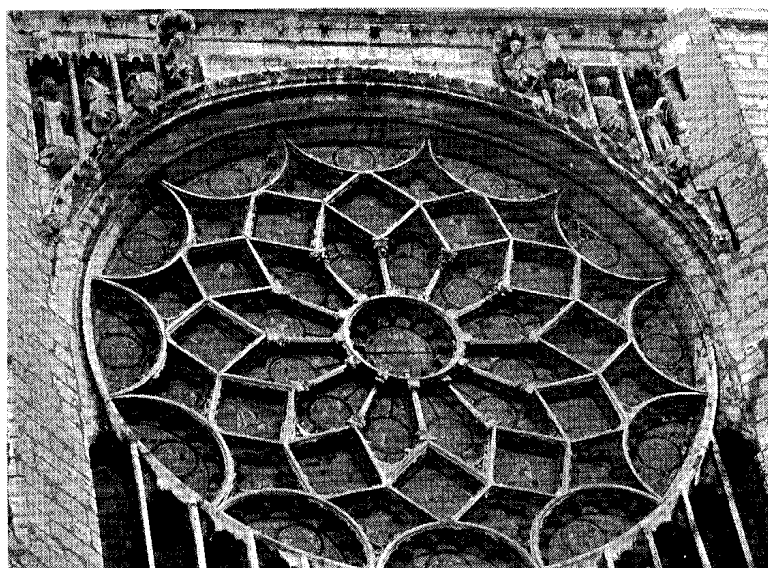
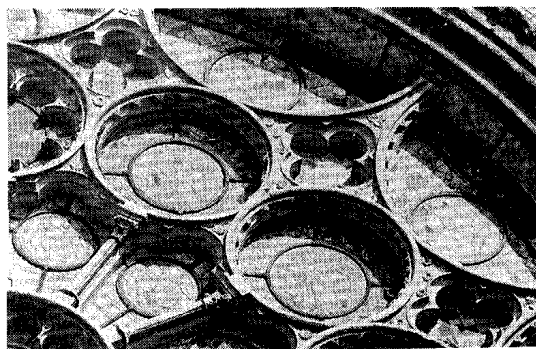
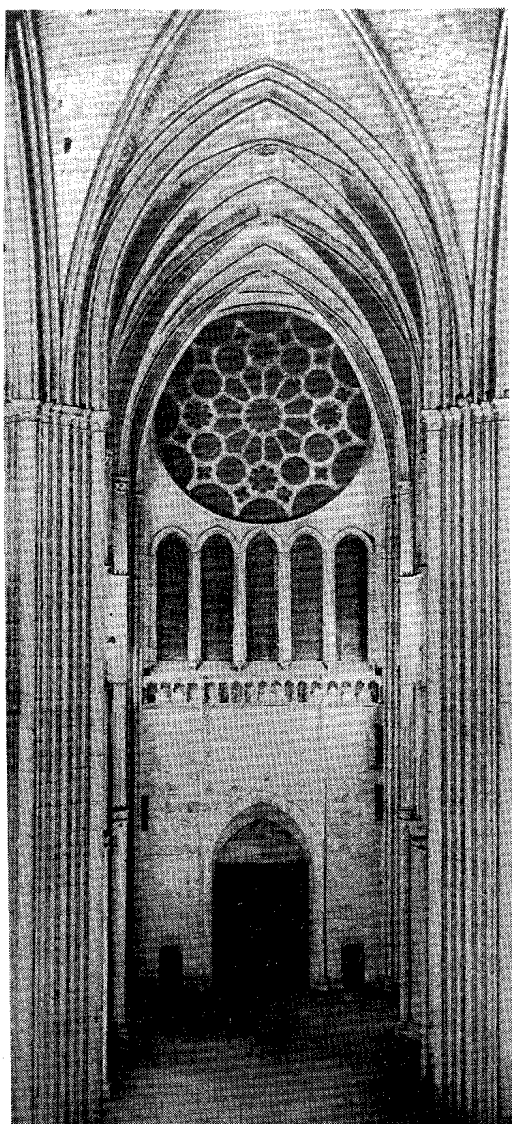
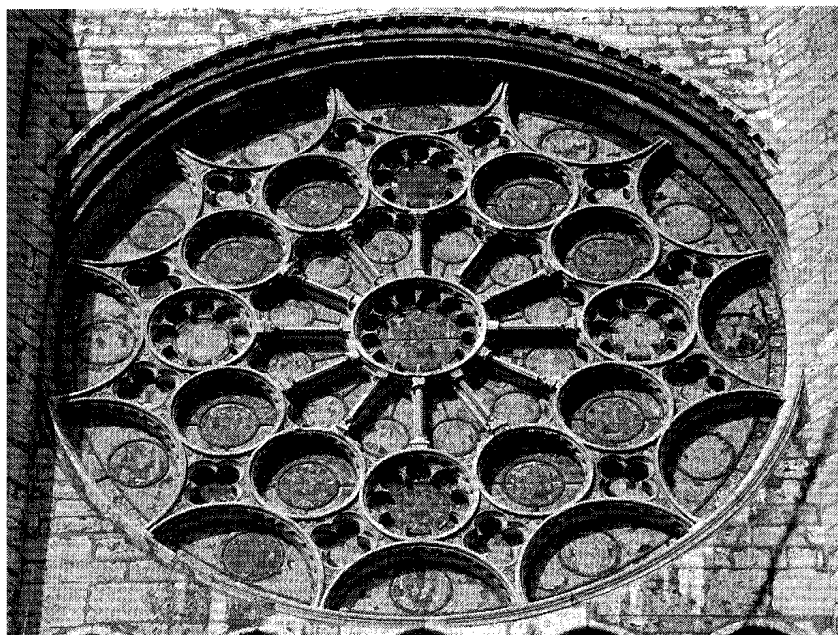
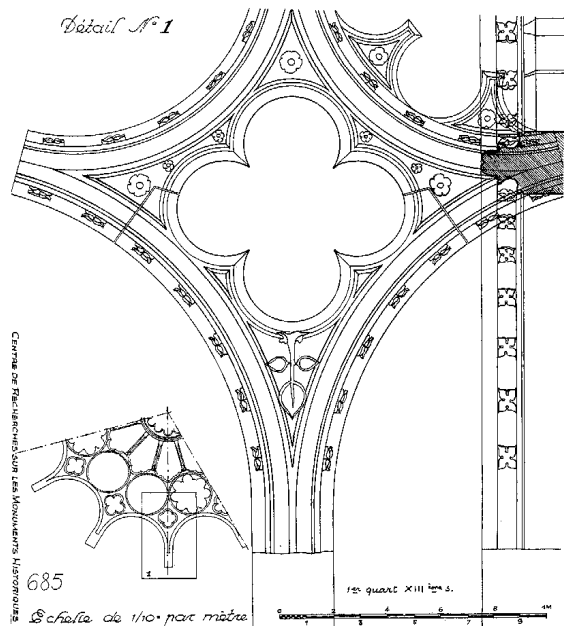
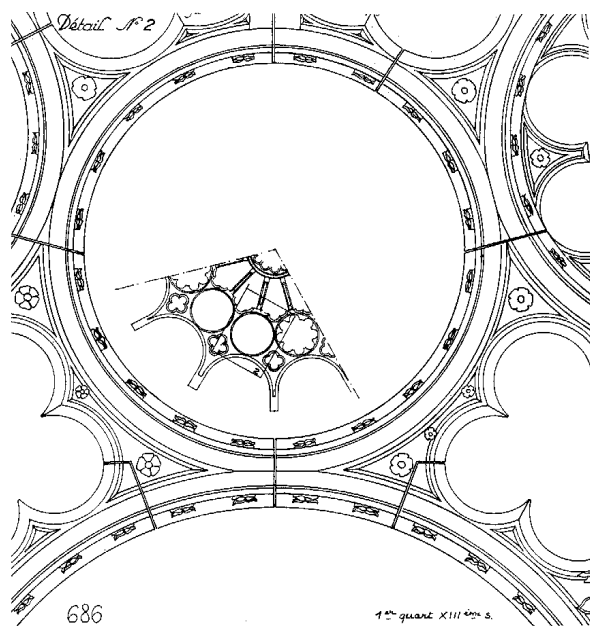


図 9, 10 シャルトル大聖堂北薔薇窓, 部分図

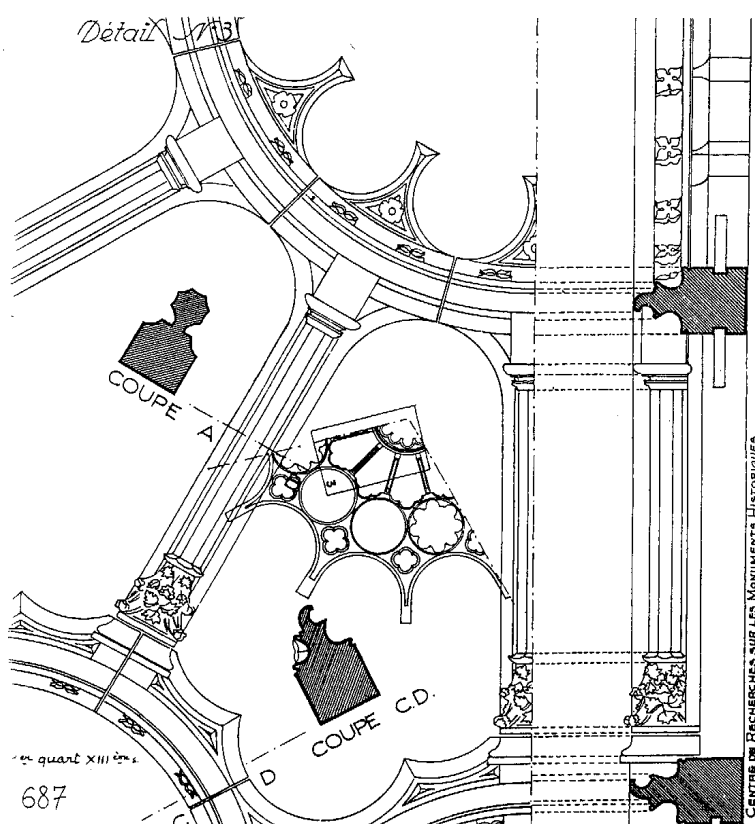


(上) 図 11, (右下) 図 12
 シャルトル大聖堂南薔薇窓, 部分図
 (左下) 図 16
 シャルトル大聖堂南翼廊内部壁面



(上右から) 図 13, 14, 15
シャルトル大聖堂南薔薇
窓, トレーサリの構造(M.
Mastorakis & R. Renard
による)

出典: Centre de Recher-
ches sur les Monuments
Historiques, *Roses, études
de structures*, 1984 年



大きな課題である。

注

- (1) シャルトル大聖堂の二つの薔薇窓について、大聖堂関連の文献には殆ど言及されているが、中でも重要なものは左記の通り。
Yves Delaporte, Etienne Huvé, *Les Vitraux de la Cathédrale de Chartres, Histoire et Description*, Chartres, 1926, 1 vol. de texte, 3 vol de planches.
Louis Grodecki, Françoise Perrot, Jean Taralon, *Les Vitraux du Centre et des Pays de la Loire (CORPUS VITREARUM MEDIAEVIÆ)* C. V. M. A. (略す) *Recensement II*, Paris, 1981, esp. pp. 39-44.
尚、豊富なカラー図版と共に薔薇窓を紹介した拙稿『ばら窓——シャルトル大聖堂——』(名画への旅・シリーズ第四巻『天国へのまなざし』中世Ⅲ) 講談社、一九九二年、五六—七九頁参照のこと。
- (2) 薔薇窓は、Rose Window (英)、『Rose, Rosace (仏)』Fensterrose (独)などの邦訳語。こうした用語がいつから用いられたか正確にはわかっていない。ペイントン・コーエンによれば、十三世紀の聖母崇敬の高まりと関係があると推測されている。しかし、中世時代の用語は、車輪窓 Rota (ラ)、『Roue (仏)』Rad (独) Wheel (英)が一般的であったという。
Panton Cowen, *Rose Window*, London, 1979, pp. 33-34.
- (3) シャルトル大聖堂内のステンドグラス窓の総面積は二六〇〇m²であるという。十二世紀の窓四枚の他は、大部分が十三世紀の作例である。近年これらのステンドグラスに関わる研究が多くなされ、特に『聖人伝』の高窓の研究は飛躍的に進められている。
Colette Manhes-Deremble, *Les Vitraux Narratifs de la Cathédrale de Chartres*, (C. V. M. A.), France, Études II, Paris, 1993.
また、寄進者や社会的状況に関する研究も興味深い。
Jane Welch Williams, *Bread, Wine, & Money, The Windows of the Trades at Chartres Cathedral*, Chicago, 1993.
- (4) 聖堂の窓について考える時、次の二つの事柄を混同していることが多い。①建築の壁体に穿たれた開口部自体を窓という場合、すなわち空隙部分のこと。②開口部の空隙を充填するために導入される諸々の手段をさす場合。例えば、アラバスタ、鉄柵、透し彫り、ステンドグラス等。石造トレーサリもこの一種と考えられる。
ゴシックの薔薇窓を、その前時代のロマネスク聖堂のオクルス窓 oculi の発展と考える時、本稿の考察が意味をもつであろう。

拙稿参照のこと。

高野「ロマネスク聖堂の窓」[1] 闇に射す内なる光、[2] 神の光の演出、[3] 色と光の交響詩 「季刊 *ichiko*」 nos. 18, 19, 20 (連載)、一九九一年。

- (5) Rose, *Étude de Structures du XII à la fin du XV siècle*, Ministère de la Culture, Centre Recherches sur les Monuments Historiques, 1984.

- (6) これらの問題について最も示唆的な論文は左記の通り。

Helen J. Dow, "The Rose Window" *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. XX, 1957.

Victor Beyer, "Rosaces et Roues de Fortune à la fin de l'art roman et au début de l'art gothique", *Zeitschrift für Schweizerische Archäologie und Kunstgeschichte*, 22, 1962, pp. 34-43.

- (7) トレーサリ tracery (英) この言葉は、仏語では一般に remplace または réseau de fenêtre と呼ばれ、独語では Fensterwerk という。英語の tracery という表現は、原図の上に薄紙をあてて敷き写すことを意味する trace という動詞からきている。

- (8) レイヨナン様式 Style rayonnant (仏) 十三世紀末～十四世紀のフランスゴシック建築の様式。窓のトレーサリが放射状に広がる形をとったことから、この名称が用いられた。尖頭型の窓とフランボワーン様式の窓の間の時代。

- (9) フランボワーン様式 Style flamboyant (仏) フランスの中世末期、十四世紀後半～十五世紀にかけて、窓に焰のようなトレーサリを用いた様式が流行する。

- (10) トレーサリの変遷については、左記の著書参照。

ローレンス・リー他著『ステンドグラス』(黒江光彦訳)、朝倉書店、一九八〇年、二二三頁。

- (11) 三つの薔薇窓の大きさ、並びにガラスの年代は左記の通りである。

西薔薇窓 直径 12 m、一二二五年頃

南薔薇窓 10.6 m、一二二一年頃

北薔薇窓 10.1 m、一二三五年頃

- (12) この南北両薔薇窓のトレーサリを、バー・トレーサリと考えることは、厳密な言い方をすれば不適切であろう。即ち、バー・トレーサリとは、定義によれば、「棒状の石材のみから成る」場合に、そう呼べるからである。シャルトルの三つの薔薇窓については、プレート・トレーサリ(西薔薇窓)を経て、バー・トレーサリへと近づく一つのプロセスと捉えるべきであろう。

(13) Jean Favier, *The World of Chartres*, London, 1990, p. 160. (Original Ed., *L'Univers de Chartres*, Paris, 1988.)

(14) 注(5)参照のこと。図13～15は、表記報告書の図を転載した。解説文が全く付されていない為、その内容を本文に簡単に記した。

(15) この写真は、下記の著書から転載したものである。Louis Grodecki, *Chartres*, Paris, 1963, p. 144.

(16) Yves Delaporte, *op. cit.*, vol. 1, p. 106. 注(1)参照

(17) 中央収斂性について、内部のステンドグラスの図像表現から見ても興味深い問題がある。西薔薇窓は「最後の審判」を表わすが、中央のキリストに向かって、十二使徒の並ぶ方向や目線が集中する形をとる。南北のそれとは異なって、収斂性が少なからずみてとれるのである。

(18) 今後の課題として興味深いのは、トレーサリの装飾が、時代と共にどのように変化したかという点である。聖堂の内部と外部のどちらか一方に優位を認めたか否か。そこに規則性が見出されるのか、という点である。そのことは、ステンドグラスの色彩の変化、特に白ガラスの普及と共に中世末期聖堂内部が明るくなるにつれ、当然ながらトレーサリは、内部から「見える」ようになっていったこと、それに応じて装飾的になってゆくことを推測させるからである。聖堂の窓の「表と裏」の関係についてもより詳細な考察をうながすことであろう。